

栄一が語る西郷隆盛と勝海舟

右は、明治新政府代表・西郷隆盛と旧幕府代表・勝海舟の会見の場面、いわゆる「江戸城無血開城」の画像です。幕末を語る際には欠かせない両雄も、実は栄一とのつながりを持っています。

維新三傑としての偉業のほか、その器量の大きさを伝える逸話が多く残る西郷ですが、栄一もまた彼の人間性に魅せられた一人だったようです。栄一の自伝『雨夜譚(あまよがり)』には、次のようなことが書いてあります。

「私が西郷隆盛とはじめて会ったのは、郷里を出て立派な武士気取りで京都をうろついている頃であった。その頃、西郷は同じ京都の相国寺に宿をとっていた。西郷は、一介の書生に過ぎない私にも快く会ってくれた上に、攘夷を語り、あるいは藩政改革を語り、さらに幕政整理を論じたりして、学ぶことが多かった。西郷は、『お前はなかなか面白い男じゃ。志を高く持っていて感心な心がけである。今後も時々遊びに来るがよい』と言われた。このような訳でその後も数度訪問したことがあるが、西郷は本当にさっぱりした態度で、いつでも親切に話してくれた。ときには『今晚豚の肉を煮るから、一つ晩飯を食べて行かないか』などと勧めてくれて、同じ豚鍋に箸を入れて食事をともにしたこともあった」

栄一が一橋家に仕えるようになってからも両者の親交は続き、栄一は、時折西郷を訪問しては様々な意見を聴いたようです。西郷は、徳川慶喜を評して「あれほどの人物は諸侯中にいないが、残念なことは決断力を欠いておられる。おぬしから上の者に話して、慶喜公の決断力がつくようにするとよい。そうすれば、幕府を倒さなくても、慶喜公を頭として大藩の諸侯を集めて統率すれば、幕府を今のままにしておいても政治は行える」と語り、栄一に助言したといえます。

時が変わり明治になると、西郷は「参議」という、明治政府の中でも大変高い地位についていました。しかし西郷は一切おごることなく、財政についての質問や頼みごとをするために栄一の家を訪ねてきたそうです。このように西郷は、栄一の力量を認めた上で、その関係を生涯大切にし、自らの立場によって体裁を取り繕ったりしない自然体の人でした。

しかし明治10(1877)年、西南戦争が勃発すると、西郷は自刃しました。栄一は「西郷翁は、他人への仁愛が過ぎて、過失に陥る傾向があらせられた御仁だった。一身を同志の仲間に犠牲として与えられた結果、明治十年の乱(西南戦争)となった」と記し、尊敬する西郷の死を悼んでいます。

勝海舟は、咸臨丸(かんにんまる)という蒸気船に乗ってアメリカに渡り、その進んだ知見をもとに、幕臣ながらに坂本龍馬をはじめとする幕府内外の多くの偉人に影響を与えたことで知られています。

志を同じくする幕臣だった栄一でしたが、実は勝に対して良い感情を持っていませんでした。その理由は、初対面の際に、栄一の敬意に反してそっけない態度だった勝に憤慨したこともありますが、そもそも、栄一が敬愛して止まない主君の徳川慶喜と勝のそりが合わず、主従の関係にありながら互いに腹に一物を抱いていたことが原因だと考えられています。そんな中、慶喜が明治新政府から処分をうけた際に、勝が慶喜を静岡に押し込め続けて世に出そうとしなかったことで、栄一の印象は一層悪化します。しかし、長い目でみれば、栄一と勝の想いの進む先は重なっていました。勝もまた、明治の世の中にあっても徳川家の汚名を晴らすべく奔走した人物だったからです。もっとも勝は、慶喜本人というよりも徳川家の復権を目指していたと言った方が正確かもしれませんが、栄一は勝の死後、その意志を継ぐ形で慶喜の名誉回復を実現したと言えるのです。

栄一と勝には一つの共通点があります。それは自らの経験を文書に多く残したことです。勝は軍艦奉行就任時から死の直前まで、40年近くも日記を書き続けました。勝の自叙伝『氷川清話』は、幕末・明治維新史としても貴重な史料です。勝は、幕府が倒れてまだ三十年しか経過していないのに、明治の世に幕末の歴史が正しく伝わっていないことを憂い、記録を残すことの重要性を説いています。栄一もまた、西郷らとの交友を綴った『雨夜譚』のほか、『徳川慶喜公伝』を刊行するなど、自らの言葉を後世に残すべく努めました。栄一はこうした書物の中で、慶喜こそ明治維新最大の功労者なのだと繰り返し主張しています。栄一は生涯を通じて折に触れては慶喜について語り、昭和6(1931)年に91歳で死去するまで、主君の名誉回復運動を続けました。

江戸幕府が存在した事実を守るべく奮闘した栄一と勝海舟。彼らの真摯な想いは、自ら残した多くの言葉によって今も生き続けています。



江戸開城談判 結城素明 聖徳記念絵画館蔵



上野公園 西郷隆盛銅像

提供 敬天愛人フォーラム



勝海舟 大田区立勝海舟記念館所蔵